

第45回 続：中世松江の「筌」漁業

[第10回のコラム](#)では、中世の松江市域での「筌」漁業について述べています。

今回は、その後、2015年4月26日に島根県立古代出雲博物館で講演を行うにあたって、出雲の「筌」について、新たに気付いたことを紹介したいと思います。

まず第10回のコラムの関係する部分を確認しておきます。

『出雲国風土記』には宍道湖・中海を結ぶ大橋川沿いの朝酌（島根県松江市、大橋川北岸）で「筌」による漁業が行われていたことが記されていますが、この「筌」がどのような漁法であったかについては、なかなか難しい問題があります。

「筌」という文字は一般的には「うえ」「うけ」「せん」などと読んで、竹で編んだ籠状の漁具を指すことが多いと思います。しかし、『出雲国風土記』の「筌」については、このような漁具ではなく、別のものと考えられており、しかもそれについて2つの説があります。

一つは、この古代出雲歴史博物館の説で、木の枝などを束にしたものを沈めて、その間に入り込んだ魚やエビなどを捕える、「柴責（ふしづけ）」のような漁法とする説です。これは、江戸時代の『出雲神社巡拝記』という史料に、出雲では「筌」の文字を「ひび」と読むと記されていることから、海苔の養殖などに使用される「ひび」を参考に復元されたものです。

もう一つは、森田喜久男氏の説です。森田氏も江戸時代の出雲で「筌」を「ひび」と読むということを踏まえていますが、『出雲国風土記』に「東西に亘す」との表現があることから、朝酌の「筌」は川を遮断するように設置される「柴手網」のような漁法ではないかとされています。

そして私は、『松江市史史料編古代・中世1』125に収められた、貞応2年(1223)の鎌倉幕府の判決書から、鎌倉時代の朝酌の「筌」(は、朝酌の郷側から津田郷側に大橋川を遮断する形態の「筌」つまり、「柴手網」型の「筌」であった可能性が高いと考えたわけです。

今回、この可能性をさらに補足する材料に気が付きましたので、以下に紹介します。

江戸時代の出雲で「筌」を「ひび」と読んだということを踏まえ、『日本国語大辞典』で「ひび」を見ると、『玉塵抄』という中世の文献に「江や浦にしばやささの葉をしかと立てて、よこに水をせいて魚をとるを、それをひびと云ぞ」という文章が用例として挙げられていました。

この『玉塵抄』というのは中国の古典に登場する熟語を集めた『韻府群玉』という書物について解説した講義を聞いた受講者の間書き、つまりノートです。そして実際に『玉塵抄』を見てみると、『日本国語大辞典』に記された文章は、二(竹冠に聚)という文字の解説として、「魚を取る器なり、こころにやなと云い、ひびと云うことかぞ」という文章に続けて記されていることがわかりました。なお、この二(竹冠に聚)という文字は「ソウ」あるいは「ズ」と読むようです。また「筌」という文字については、「こころには魚をとる物にうけと云あり、筌をもうけとよむぞ」とありました。

『玉塵抄』のもとになった講義は、永禄6年(1563)から京都で惟高妙安という禅宗の僧侶が行ったものですので、この頃の言葉として「ひび」が、柴や笹をぎっしりと立てて水を横切るように遮って魚を取るもので、築のようなものを指していたことがわかります。

しかもさらに興味深いことには、実はこの惟高妙安はこの講義より前に、伯耆の山名氏や出雲の尼子経久に招かれて、伯耆・出雲で30年も過ごしたという人物なのです。

「ソウ」という文字の解説として、惟高妙安が言っている「ひび」が出雲で見た「ひび」であり、それは川を柴や笹で遮って魚を取るものであった可能性は高いと思います。

以上を踏まえると、『出雲国風土記』の朝酌の「筌」も「ひび」と呼ばれる「柴手網」型のものであった可能性が高くなってくるのではないかと感じています。

それはともかく、ここで強調したいのは、「筌」のように、同じ文字が時代や場所によって異なる読み方がされ、異なるものを意味する場合があること、そして、古代の『出雲国風土記』を解釈するのに、中世の史料や近世の史料が重要な役割を果たすことがあるということです。

歴史の謎は、さまざまな史料を幅広く組み合わせることによって明らかにされるのであり、そこに歴史の謎を解く難しさと楽しさがあるのです。

主な参考文献

中田祝夫「玉麈抄について」（『玉麈抄』勉誠社、1972）

藤岡大拙「惟高妙安と尼子氏」（『島根地方史論攷』ぎょうせい、1987）

西田友広「中世松江の「筌」漁業」（第10回松江市史編纂コラム、松江市HP、2011）

（平成27年7月3日／中世史部会：西田友広）